2009/01/24 朝日新聞

黒潮の源に眠る「遺跡」

南海の「理想郷」 与那国島

【メモ】与那国島へは、琉球エアーコミューターが那覇から週4便、日本トランスオーシャン航空が石垣島から毎日1、2便就航している。石垣島からはフェリーもある。「海底遺跡」はグラスボートで見学が可能。

南の海のどこかに、飢えも苦しみもない理想郷がある――。

黒潮が洗う熊野古道でそんな伝説を耳にした。ルーツを求め南へ下ると、黒潮の源流・与那国島にたどり着く。

ハイ・ドゥナン。熊野や土佐で「普陀落」と呼ばれるユートピアが、島でそう呼ばれていた。現地語でハイが南、ドゥナンは与那国。まさに「南の海のどこかに」だ。もちろん、地図にはない。それでも、巫女が隠然たる力を持つ島で、その存在をどこかで信じる人は、今もいるという。

熊野や土佐では、普陀落を目指す行者がかいのない小舟で大海に漂い出た。与那国でも17世紀、人々が命がけの渡海を図った。島のある集落では4家族が船出したという。彼らはどうなったのか？　集落の人は「さあ。誰も戻ってこなかったから」と話した。

当時、島は琉球王朝の支配下で過酷な人頭税を課せられた。税負担を軽くするため、島民は口減らしに腐心した。

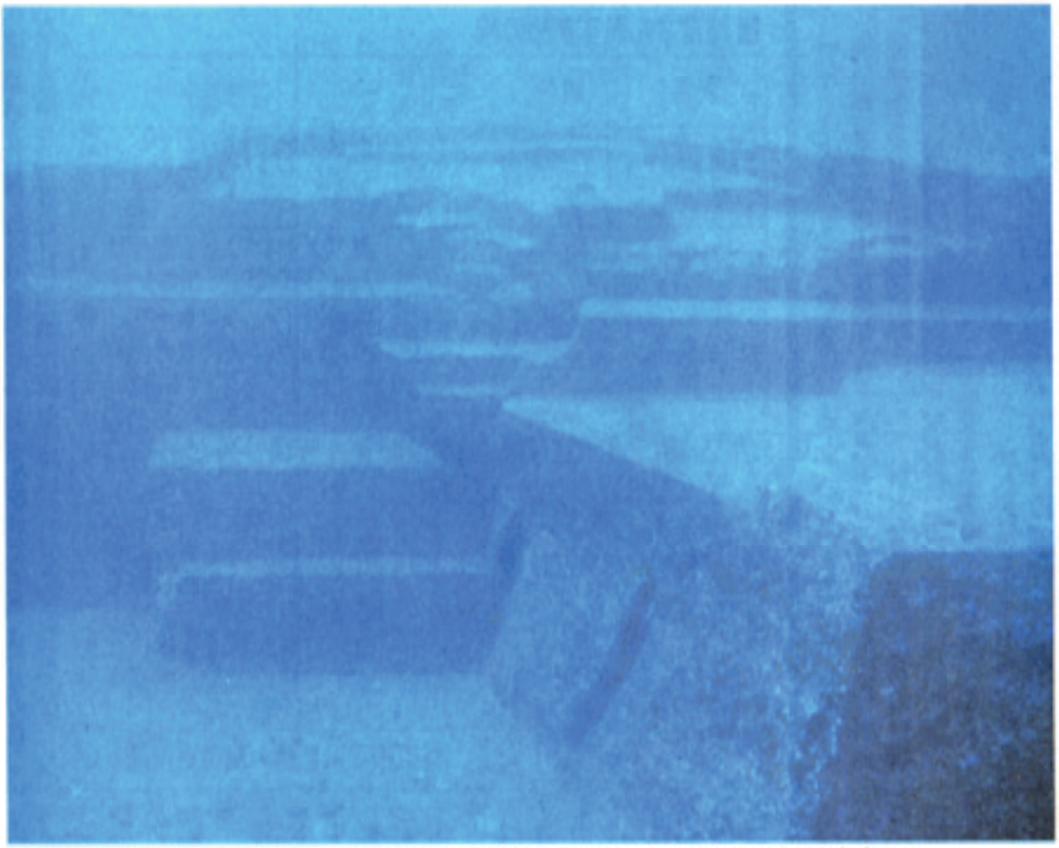
妊婦はがけの深い切れ目でジャンプを強いられ、失敗した者は落ちて死んだ。男はある日、一斉に山奥の田の一区画へ集合を命じられ、足が不自由で遅れて区画に入りきれなかった者は殺された、という。

もともと豊かな島だった。絶海の孤島のようで、台湾まで111キロ。雨が多く稲作に適している。海の幸も豊富だ。朝鮮の漂流者が伝える15世紀の文献では、支配者がおらず、稲が豊かに実り、子を慈しみ育てる心穏やかな島民像が描かれている。

その豊かさが、実は遠い昔、高度な文明すら生んでいた――。そんな夢を抱かせる発見が86年にあった。「海底遺跡」がそれだ。東西250メートル、南北150メートルで巨石建造物にみえる。人工物か否かの論争は未決着だが、遺跡とすればかなりの経済力を持つ力強い社会が存在した証拠となる。

遺跡を古代の墓とみる発見者の新嵩喜八郎さん(61)はいう。「与那国は何度も巨大ツナミで人が消え、別の人間が入ってきては再び栄えた。そんな歴史の繰り返しだったのだろう」

理想郷は、海のかなたではなく、島そのものではないか。エメラルドグリーンの海に眠る「遺跡」を見ていると、伝説の原点にたどり着いたような思いにとらわれた。（吉岡一）



島南部の海に眠る「海底遺跡」。「メインテラス」と名付けられた部分を南東から撮影した。できた年代も、2千年前～1万年以上前と諸説ある＝新嵩喜八郎さん提供

アスパラトラベル　検索　もっと詳しく

「与那国島」の旅の詳細や写真を、アスパラクラブのホームページで紹介しています。